

音が跳ね回って暴れている。

それを切り裂くようなストロボと、床から足を伝って心臓まで響いてくる低音。

友達に連れてこられ初めて入ったクラブは、今日はなんとかナイト…っていうイベントの日らしく、人が詰め込まれていた。

ついてきただけの私は「最前行こ！」と友達に手を引かれたものの、一瞬で人波が割りこんで友達とはぐれてしまった。

そのまま人の体の波に友達が消えていく。私を置いて前のほうに行ってしまったようだ。

(こうなっちゃったらもう合流できないよな…。とりあえず一回外出るか、苦しいし…)

斜め後ろを見ながらゆっくり後ずさる。

できるだけ人の邪魔にならないように、身を屈めて、ゆっくりゆっくり。

そうしていると体が壁に当たった。

振り返ると背の高い男の人の胸。目線を上げると眩しいくらいの整った顔があった。

実際かなり明るい髪色が光を反射して長めの毛先が透き通っているように見える。

「どしたの？お友達とはぐれた？」

私に聞こえるように身を屈めて耳元でそう言われた。

「そうなんですけど、一旦出ようかなって思って…」

「そっかそっか、じゃあ今ひとりなんだね」

にっこり笑った顔が周りに目配せした。

その目線を追うとそれに応えたのは周りにいた二人の男の人。短い黒髪の人と、茶髪でゆるくパーマがかかっている人。金髪のこの人と同じように背が高く顔が整っていて…かなり雰囲気のある人たち。

少し歳上くらいだろうか。

「じゃあさ俺たちと遊ぼっか♡」

「え…っ？」

その言葉に、私を囲んでいた彼らはさらに近づいて体を寄せてきた。

彼らの胸の位置に頭のある私なんか外から見えなくなってしまうだろう。

その状態で金髪のお兄さんが私を後ろから抱きしめてしまった。

「…！？」

びっくりして動けない。

その人の腕は私を抱え込むと大きな手のひらを両胸まで擦り上げてきた。

「ちょ、ちょ、なに、」

「楽しいことしょ？」

手が胸を包んで撫でている。

しかもオフショルのニットを着ているせいで露出している肩にキスまでしてきた。

私が動けずにいると黒髪のお兄さんまで前から抱きついてお尻に手を回してくる。

「何してるんですか…！」

「遊んでるんだよ♡」

その人は腰を落としてお腹の下辺りに股間を押し付けてくる。

それは何度か上下すると服越しでも分かるくらいに硬くなっていった。

……この人たちが何しようとしているのか分かってしまった。

「やめてください、こんなところで……、うわっ」

金髪のお兄さんが後ろから肩、首にキスしながら私のニットをずり下げる。

それは胸の下まで落ちて、私は下着を晒してしまう。

「ちょっと！！さすがにこれは…！」

「大丈夫大丈夫、見えないって♡」

ずり下げたニットごと私の腕を抱き込みながら、お兄さんの指は私の乳首へ。

指の側面をブラジャーの先端に当てると、

くに♡

くい♡くい♡

下着越しに乳首をゆるく刺激してきた♡

「……っ」

思わず腰が引けてしまう。お兄さんに閉じ込められた体はうまく動かせないけれど。

くい♡くい♡

その指は乳首を掬うように下から上へ撫であげて、

くに♡くに♡♡

軽く押しながら下へ滑る♡

くい♡くい♡くい♡くに♡くに♡♡

抱きしめる強さとは逆に優しくそれを何度も繰り返された♡♡

「……っ、…………や、め、」

(まずい、かも……♡乳首じんじんする、気持ちよくなっちゃう……)

後ろから抱きつくお兄さんには肩や首にキスされながら乳首を刺激されて、前から抱きつくお兄さんにはお尻を撫で回されながら下腹部に硬くなったちんぽを押し付

けられて♡

体温が上がっていくのが分かる♡

意識がお兄さんたちの指に集中してしまう♡♡

いくらお兄さんたちが背が高いからって周りから見えないなんて嘘だ、横にいる人は明らかに気付いてチラチラとこちらを伺っているんだから♡

騒がしすぎる音のせいで声は聞こえないだろうけれど私が囲まれ触られていることは分かっているはずだ♡

すっかり勃起かけている乳首に体をビクビクと震わせることしかできない私に、横にいた茶髪のお兄さんが手を伸ばしてきた♡

お尻側から短いスカートをめくりあげ足の間へ伸びてきた手は足を開かせるとその間の下着をなぞってくる♡

長い指がお尻の割れ目からクロッチを通り過ぎてクリトリスの辺りまで♡

「……っ、う♡」

「あれ？もしかして濡れてない？♡」

「乳首気持ちいいの？まだブラの上からすりすり♡してるだけなのに♡」

「それとももうちんぽ欲しくなっちゃった？お姉さんに擦りつけてるこの硬いの、おまんこに欲しい？♡」

くに♡♡くに♡♡くに♡♡

厚い生地ブラジャー越しとは言え乳首の膨らみをしつこく撫でられ、それに体が反応してしまう♡

顔を歪ませ耐えていると、下着をなぞっていた指は明らかに一箇所をしつこく撫で始めた♡

クロッチを過ぎた辺り、柔らかく盛り上がったそこを重点的に、

くるくる♡♡くるくるくる♡♡ふに♡ふに♡ふに♡  
撫で回し、押す♡

「んう…！♡♡♡」

「ここだね、お姉さんのクリ♡♡」

「こんなところでおっぱいと一緒にクリまで触られちゃったねー♡でも気持ちいいよね、気持ちいいって顔してる♡♡」

くにくに♡♡くい♡くい♡くにくにくに♡♡♡

くるくるくる♡ふに♡♡ふに♡♡ふに♡♡くるくるくる……♡♡♡

布越し、しつこく性感帯の突起を撫でられて♡♡

「……ふ♡♡♡う”っ♡ん♡♡ん♡♡ん”♡♡♡」

私はいつの間にかお兄さんたちに抱きしめられながら  
足を開いてしまっていた♡

「いいね～、お姉さん気持ちいいこと好きでしょ♡気持ち  
いいことに逆らえないんだね♡♡」

「本当は上に移動してからのつもりだったけど…ここで  
一回イっとく？♡♡」

「周りもチラ見してきてるし…こんなところで感じちゃ  
う変態お姉さんの痴態見せつけよっか♡♡♡」

そう言うのと、その手はさらに私を責めてきた♡♡

ぐりっ♡♡くにくにくにくにっ♡♡ぐり♡ぐり♡ぐり  
♡

乳首を擦っていた指が少しだけ圧を強め押し付けなが  
ら上下し♡

すりすりすり♡♡こしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこ  
しゅこしゅ……♡♡♡♡

クリトリスを撫でていた指も爪先で擦るように狙って  
くる♡♡

「あっ♡♡あ♡あ♡♡♡あ♡あ♡あ♡あ♡♡♡」



周りがうるさくて聞こえないのをいいことに、私の漏れる声は止まらなかった♡♡♡♡

ぐりぐりぐりぐり♡♡♡♡くい♡♡くい♡♡ぐりっ♡♡  
♡ぐりっ♡♡ぐりっ♡♡

こしゅこしゅこしゅ……っ♡♡♡♡こしゅこしゅこしゅこしゅこしゅッ♡♡♡♡

「……っ♡♡や♡♡♡あ♡やめ♡♡♡あ♡あっ♡♡ああっ♡♡♡」

乳首もクリトリスも下着越しに鈍い刺激を送られ続ける♡

それは足を踏ん張っている私のお腹の奥に響いて♡♡

(やばい、イっちゃう、周りの人たちに見られてるのに♡♡人がたくさんいるのに♡♡足とお腹に力入って、乳首とクリでイっちゃう…！♡♡♡♡♡)

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりっっ♡♡♡♡ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりっっ♡♡♡♡♡

こしゅこしゅこしゅこしゅこしゅッ♡♡♡♡こしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこしゅッ♡♡♡♡♡

私が絶頂に近いことを察したんだろう、二人の指はまた力が強くなって、前から抱きしめてくる黒髪のお兄さんはちんぽを意識させるようにずりずりとお腹で擦ってきた♡♡♡

「……ッ」、だ、だめ♡♡♡♡♡これ、……ッ♡♡イ、……………！！♡♡♡ふっっ、うゝ…！！♡♡♡♡♡」

小さく早くカクつく足♡♡♡♡

ガクンッ♡♡

と体が大きく落ちそうになってお兄さんたちに抱きしめ直される♡♡

私がイってしまったことは分かっているはずなのにその手は止まらないどころか、金髪のお兄さんは私のブラジャーに手を突っ込んできて胸をその上に掬い上げてしまった♡♡♡♡

「……！！！」

完全に胸を露出してしまった…♡♡

それに驚いて隠そうとしても腕はまたお兄さんに体ごと抱きしめられている♡♡

見てる、周りの人が……♡♡♡♡♡

こんなところで乳首とクリいじられてイっちゃって、  
胸まで出しちゃってるの…♡♡♡♡♡

「すっごく勃ってるね♡♡乳首気持ちよかったみたいで  
嬉しいな♡♡♡」

「…♡♡は、あ、あ♡♡♡」

胸を乗せたカップの上部分に勃起した乳首を擦り合わせ  
るように、金髪のお兄さんは乳首を擦り続けている♡  
♡

いった余韻でまだふわついた体は大袈裟にそれに反応  
した♡♡

そうしているとクリトリスまで、下着をずらされその  
隙間から入ってきた指に直接触られた♡♡

ぬるついた割れ目を一撫でし愛液を纏って指の腹で根  
から先へ塗りつけるように撫でられる♡♡♡♡

「う”♡♡あ♡♡♡は♡♡ッあ♡♡だめ、も、やめ、て  
…♡♡♡♡」

「興奮してるくせに♡♡♡」

それから今までちんぽを擦りつけていた黒髪のお兄さ  
んは体を屈め私の顔のあちこちにキスしたあと、その唇

で唇に触れてきた♡♡

唇を啄み開かせると重ね合わせるように角度をつけて  
押し付けてくる♡♡

「ふ♡♡♡っ♡♡……っ♡♡♡」

群がるお兄さんたちに乳首もクリトリスもいじられて  
キスまでされて、周りからはチラチラと好奇心を隠さない  
目で見られて♡♡♡♡♡

こんなのためなのに一度イかされた体は勝手に興奮し  
て反応してしまう♡♡♡♡

「もっかいイこっか♡♡♡♡」

耳に唇を触れさせながら金髪のお兄さんがそう言った  
♡♡

そして耳に吸い付いて、布ごと乳首を擦っていた指は  
激しくなり♡♡

クリトリスを撫でていた指はその小さな粒をタップす  
るように弾んで♡♡

キスは深くなった♡♡♡♡

こすこすっ♡♡♡♡こすこすこすこすッ♡♡♡♡♡

乳首は痛いくらい勃起しながらその摩擦を感じる♡♡

たぷっ♡♡たぷっ♡♡たぷっ♡♡♡♡ぴたッぴたッぴ

たッぴたッぴたッ♡♡♡

愛液を塗りつけられながら弾かれるクリトリスは叩かれるたびにぎゅッ♡♡とお腹を締めて♡♡

ぢゅっ♡♡ちゅ♡♡♡ちゅ、ちゅ、っ♡♡♡ちゅう♡

♡♡

隙間なく密着させられた口内の粘膜はそれごと吸われる♡♡♡♡♡

(だめ……♡♡♡イったのに気持ちよくなっちゃってる♡♡♡♡知らない人なのに、見られてるのに♡♡♡♡これきもちいい♡♡♡♡♡イかされたい♡♡♡♡♡このまま、もう一回……♡♡♡♡♡)

気持ちよくて開いてしまっていた足は更に腰を落としてみっともなくガニ股になっていた♡♡

手はかろうじて私を閉じ込めている腕に爪を立て、背中丸まり、舌は誘われるがままに突き出す♡♡♡♡

そして体中を満たしていく熱に意識を持っていかれた

♡♡♡

「……っ♡♡ふ♡♡♡ん、むッ♡♡♡♡……い、いく、いくっ♡♡♡♡またイク♡♡♡♡♡……っ、……  
……………！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

カクカクカクカクカクカク……♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

震える足♡

「…ッ、うあ、あ……、は、あっ、はあ♡♡♡♡」

力んだ体を絶頂感が駆け抜けていって大きく呼吸すると、お兄さんが耳を食んだまま笑ったのが聞こえた♡

「お姉さんさいこー♡♡もーっと気持ちよくなるっかあ♡♡♡♡今度は俺たちのちんぽでお姉さん気持ちよくしてあげる♡♡♡♡」

そこまで言ってやっと三人の体は離れた♡  
と言っても足がふらついてうまく立てない♡

お兄さんに手を取られながら移動したのは二階、お兄さんが言うにはそこはVIP席だった♡♡♡

「ほら♡ここ座って♡♡♡まずはあそこでイけた可愛いクリちゃんにいいこいいこ♡♡♡してあげないとね♡♡♡♡」

フロアは見下ろせるものの横は壁で仕切られたその空間にはベッドにもできるくらい大きな革張りのソファ♡

柵の向こうの一階ではまだ大きな音が響いているけれど、壁があるおかげだろう、ここではかろうじて話し声くらいなら聞き取れた♡

ソファに座った茶髪のお兄さんの足の上に座らせられた私♡

足元には金髪のお兄さんが跪き、下着を抜き取った私の足を広げる♡♡

「…あーあ、こんなにぐちょぐちょにして♡♡♡♡」

お兄さんはそこへ顔を埋め口を開け♡♡

はぷ♡♡♡♡

「うあ♡♡」

湿った粘膜でクリトリスごとおまんこを包み、それから、ずり♡ずり♡と狭くなっていく唇は、

ぢゅ♡♡

皮ごとクリトリスを吸った♡♡

「ッ♡♡♡あ、ん♡♡」

足をピンと伸ばしてしまうと、茶髪のお兄さんが両足を持ち上げ開かせてくる♡♡♡♡

ぢゅ♡♡ぢゅ♡♡

ぢゅるっ♡♡ぢゅぶ♡♡♡

唇が粒を揉み込みように動く♡♡♡

そのたびにぞくぞくと背中がくすぐったい♡♡

ぢゅぶぶっ♡♡♡ぢゅる、るるるる、ぢゅるるるる♡♡♡

空気を含ませながら吸い上げ、それから振動を与えるように顔を振られる♡♡♡♡

「んッ♡♡♡あ♡♡あうッ♡♡…っん♡♡ああっ♡



♡♡♡」

「きもちーね～？♡♡♡♡クンニ大好きなんだ♡♡♡♡」

「じゃあ俺はこっちしててあげようかな？♡♡♡」

横に座ってきた黒髪のお兄さん♡♡♡

私の指に指を絡めると上半身を屈めて勃起っばなしだった私の乳首にキスをして、それからそこも、

ぢゅぼっ♡♡

ぢゅぼぼぼぼっ♡♡♡♡♡

れるっ、れるれるれるれるっ♡♡♡♡

吸い上げながら舌で舐め回した♡♡♡♡

「ふッ♡♡う、ううう……！♡♡♡♡♡」

さっきイカされたクリも乳首もまた刺激を与えられて私はお兄さんの膝の上で体を縮こませた♡♡♡♡♡

開かされていた足は自ら大きく広げ、ビクつく背中はお兄さんの胸に押し付けてしまう♡♡♡♡

「お姉さん、気持ちいい？気持ちいいって言って♡♡」

茶髪のお兄さんに耳に唇を寄せながら喋られる♡♡

くすぐったさに首をすくめると輪郭をなぞるように舐められた♡♡♡♡

「き、きもちいい、です……♡♡♡♡♡」

「そう言ってもらえて嬉しい♡♡ちゃんとちんぽあげるからね♡♡♡まずは慣らそうか♡♡♡」

「あっ、あ…？」

お兄さんがそう言うと、濡れたおまんこに何か入ってきた♡♡

すぐにそれがお兄さんの指だと気付く♡♡

二本、ゆっくり入ってきたそれは壁を撫でるようにゆっくりと動き始めた♡♡♡

それだけなのにまた気持ちいいところが増えて意識が持っていられる♡♡♡♡♡

ぢゅっ♡♡♡ぢゅる、ぢゅる、ぢゅぷ♡♡ぢゅううう…っ♡♡♡♡♡

ぢゅぼっ♡♡♡れるっ♡♡れるれるれるるっ♡♡れられられられられら……♡♡♡♡♡

乳首もクリも二人の唇と舌でひたすらに舐められ♡♡

くちゅ♡♡♡くちょ♡♡ぢゅぷぢゅぷ♡♡ぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼッ♡♡♡♡♡

濡れた中は指で擦られる♡♡♡

「ふアっ♡♡♡あ♡♡あ、♡♡♡こんな…♡♡♡んあッ♡♡あ、おまんこ♡♡そこ、だめ…っ♡♡♡♡♡」

吸われるクリトリスの近く、おまんこの上側に指が当てられ、そのまま引きずるようにピストンし始めた♡♡♡

「あっ♡♡あ、あ、あああっ♡♡それ♡♡♡きもちいから、だめえ♡♡♡♡♡」

「だめなの？♡♡おまんこ指飲み込もうとしてぎゅー♡♡♡♡♡」

ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽっ♡♡♡♡♡

指の動きが一定のリズムになった♡♡

追い詰めるみたいなその動きに腰がずり下がり、それでもクリトリスを吸う唇も乳首も吸う唇も離れない♡♡♡♡♡

どれからも逃げられないまま、気持ちいい感覚ばかりがまた体に溜まっていく♡♡♡♡♡

「あッ、あ〜〜〜〜♡♡♡♡♡いいっ、これ♡♡きも

ちよくなっちゃう♡♡♡♡またイっちゃうからあ♡♡♡♡♡」

「かわいいねえ♡♡おまんこいーっぱい撫で撫でしてあげから♡♡♡これでイこ♡♡♡♡♡クリも乳首もちゅっちゅ♡してもらいながらおまんこ指で撫で撫で♡されてイこ♡♡♡♡♡」

「あ♡♡♡あ♡♡♡あ”♡♡♡イきそ♡♡♡♡♡クリ♡ビンビンしてる…！♡♡♡♡♡♡」

ぼぢゅ……ッ！！♡♡♡♡♡

絶頂が近づいて思いっきり開いてしまった足♡♡

それを察したのかクリトリスをしゃぶっていた金髪のお兄さんは思いっきり音を立てて、まるでフェラチオするみたいに顔を上下させた♡♡♡♡♡

ぼぢゅうううッッ！♡♡♡♡♡

ぼぢゅッッ！！♡♡♡ぼぢゅッッ！！♡♡♡ぼぢゅッッ！！♡♡♡ぼぢゅッッ！！♡♡♡♡♡

強く吸われ敏感になったところを更に唇で締められる♡♡♡♡

それがとんでもなく気持ちよくて開いた足の指先がかばっ♡と開いてしまう♡♡♡♡

「アッ、あああっ！！♡♡♡♡つよいっ、クリつよい……！！♡♡♡♡♡だめだめだめっ、イク…！！♡♡♡♡♡イク、う……！！！！♡♡♡♡♡あああああッ！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

ガクガクと体が痙攣して、それを茶髪のお兄さんに片手できつく抱き留められて♡♡♡♡♡

絶頂感がそのまま引くと思ったのにそうではなかった♡♡

中に入っている指が三本に増えた♡♡♡♡♡

しかもその指がさっきまで撫でていた上側に強く押し当てられ♡♡♡

ぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょ……！！！！♡♡♡♡♡

思いっきり圧迫しながら揺さぶられる♡♡♡♡

その上乳首は伸ばすように吸い上げられ、クリトリスはフェラチオを続けられたまま♡♡♡♡

ぢゅぅぅ〜〜〜〜♡♡♡♡♡ぢゅぅぅぅぅぅ……っ♡♡♡♡♡

ぼちゅッッ！！♡♡♡ぼちゅッッ！！♡♡♡ぼちゅッ  
 ッ！！♡♡♡ぼちゅッッ！！♡♡♡ぼちゅッッ！！♡♡  
 ♡ぼちゅッッ！！♡♡♡

ぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょ  
ぐちょ！！！！♡♡♡♡♡

「……ツツ、お”、………〜〜〜〜っ！！♡♡♡♡♡  
ま、……ツだめ、っほ、お”♡♡♡♡♡♡♡♡」

ぢゅうううっ♡♡♡♡♡ぢゅ…………ツツツ！！！！  
♡♡♡♡♡

ぼちゅッッ！！♡♡♡ぼちゅッッ！！♡♡♡ぼちゅッ  
 ッ！！♡♡♡ぼちゅッッ！！♡♡♡ぼちゅッッ！！♡♡  
 ♡ぼちゅッッ！！♡♡♡

ぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょぐちょ  
ぐちょ！！！！♡♡♡♡♡

「イ、った、のに……い♡♡♡♡♡♡ン」 、 お、お、  
……お、っほ♡♡♡♡♡♡♡♡」

イきっぱなしの体に追撃で快感を与えられて♡♡♡♡♡

体が壊れたみたいにぶるぶる震える♡♡♡♡

私は思いっきり足を開き首を伸ばして、周りの騒音で聞こえないのをいいことに呻いた♡♡♡♡

「や、あ” あああっっ、イ” く！！♡♡♡♡♡またイっ  
ちゃう” う” う” ………！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡……  
ンオ” おおおおおおお！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

抱えきれない絶頂に悶えて、お兄さんの膝からソファ  
へ体がずり落ちた♡

その体を受け取ったのは黒髪のお兄さんだ♡

腰を掴まれ背を向けたまままた膝の上に乗せられる♡  
♡

「お姉さんのマジイキ顔見てたらもうちんぽバッキバキ  
だよ♡♡♡♡」

「……はあ、あっ、うそ………」

「ほらお待ちかねのちんぽだよ♡♡お姉さんのほかほか  
発情まんこにバッキバキさかりちんぽ入れさせて♡♡♡♡  
♡」

腰を落とされて、十分に濡れたおまんこの入り口は黒  
髪のお兄さんのちんぽを迎え込んでいってしまう♡♡

入り口から開かれて中を広げて進んで、奥に、とん♡  
と当たった♡♡♡♡

「…………♡♡♡♡♡♡♡♡」

乳首やクリトリスへの直接的な刺激とは違う、じんわりとお腹の奥から湧き上がるような満たされていく感覚に私は目を白黒させた♡♡♡♡

何度もイカされて正直体は疲れ切っていた♡

汗でメイクもどろどろだし髪もボサボサ、絶頂のたびに突っ張っていた手足はまだ痺れているような感じがする♡

もうイきたくない、かも、

なのに、

「クリちゃん丸見え♡♡♡♡またフェラしててあげる♡♡」

金髪のお兄さんがまた私の股間に顔を埋めて窄めた唇でクリトリスを吸い上げると、

「お” ……ッッ！！♡♡♡♡♡」

「やべ、きもちいい♡♡♡♡♡♡」

体がビクンッ♡と一瞬飛び上がって中を締めたのが分かった♡♡



「あ♡♡…………お♡♡♡…ん♡♡♡♡♡」

「あ〜〜〜♡♡♡♡♡まんこがちんぽ圧縮してくれて  
る♡♡♡すっげえ気持ちいい♡♡♡♡♡このままお  
まんこのこの盛り上がってるところ擦っちゃおっかあ♡♡  
♡♡♡」

「……だ、め♡♡♡♡いまだめ♡♡♡♡♡」

だめって言ったのに♡♡♡♡

お兄さんは私の腰を掴んでその腰を前後に動かし始め  
てしまった♡♡♡♡♡

ぐちゅッ！♡♡ぐちゅぐちゅッ！♡♡♡♡ぐちゅッ！  
♡♡♡ぐちゅッ！♡♡♡ぐちゅッ！♡♡♡

「ッおほ♡♡♡お”っ！♡♡んおっ、おおお”！♡♡♡  
♡♡」

■続きは製品版にて♡